

氷の国のアイミン

2人はともだち？



shimmei

二人はともだち？

2人はともだち？

あるところ、ピルチュワという国に、2人の友達がいました。

名前は、『アイミン』と『ホカロン』

この国の西側にある【夢見ヶ丘】という場所は、ず〜っと長い間 氷に閉ざされていましたが、ホカロンが来てからこの夢見ヶ丘に緑が戻ってきます。それまでず〜っと凍っていた動物達も、氷がとけて元気に走り回っています。緑の大地に氷の丘。 以前は氷の丘でしたが、いまは氷緑（ひょうりょく）の丘になりました。 2人はここで、動物たちと遊んだり、緑の大地を走り回ったり、氷の丘をすべったりと、とても楽しく暮らしていましたが、でも何故か喧嘩ばかり・

すこしその様子をのぞいてみましょう。

緑の大地の小高い丘に、小さい木の小屋があり、そこにホカロンが住んでいます。

ホカロン「今日は何しようかなあ〜、そうだ！アイミンと一緒に丘滑りをしよう」

ホカロンは早速アイミンの家に遊びに行きました。緑の小高い丘を駆け下り、緑の大地を走り抜け、氷の長テーブルの広場から氷の丘を駆け上がってアイミンの住む氷のお家に着きました。門番のマンモス・ルフルに挨拶をし、お城のような立派な家のドアをノックします。

ホカロン「トントントン あーそーぼー！ アイミン！ あーそーぼー！」

するとアイミンが氷のドアを開けます。

アイミン「ホカロン、おはよう。」

ホカロン「アイミン、遊びに行こう！」

アイミン「ホカロン、あなた朝ご飯食べたの？」

ホカロン「ん？まだー！」

アイミン「もお」

アイミンはホカロンを氷の家に入れ、テーブルに座らせました。そしてアイミンは両手を出し、左手に「ふ〜っ」と息を軽く吹きかけて氷の器を作り、右手をその上に持ってきて指をコショコショこすり合わせると、そこからかき氷が出てきました。

アイミン「はい。シロップはテーブルの適当な物を使って。 あ〜、イチゴのシロップがもおちょっとしかないなあ」

ホカロン「まかせといて、おいらまた作っとくよ」

アイミン「じゃ〜ついでにブルーベリーもお願い」

ホカロン「うん」

ホカロンはそういいながらかき氷を口にかきこんだ。

二人はともだち？

ホカロン「アイミン！遊びに行こう！」

アイミン「いまお茶を入れてるのに～、せっかちなね～」そういいながらお茶もそのままに二人は家を飛び出した。

ホカロン「ソリやろー！」

アイミン「はいはい」

アイミンは腰を落とし、地面にふーっと息を吹くとそこから氷のそりが出来上がりました。ちゃーんと手で持つ取っ手付きです。

アイミン「ホカロンい～い？ここの取っ手をちゃんと手でもって．．．」

アイミンがホカロンに説明してる間に、ホカロンは氷のソリに寝そべて

ホカロン「それ～！」

アイミン「こ～ら～！人の話聞いてんの～！！」

アイミンも慌ててホカロンを追いかけます。

ホカロン「丘の下まで競争だ～！」

二人は猛スピードで丘を滑り降りて行きました。勝敗は～？

ホカロン「僕の勝ち～！」

アイミン「何言ってんのー！私の勝ちだよ！」

ホカロン「違うもん！僕の勝ちだもん！」

アイミン「丘の下まででしょー！だったらそこが丘の下なんだから、私が勝ってるじゃん！」

ホカロン「違うもん！僕が勝ってたんだもん！」

アイミン「もお！ホカロンなんか知らない！」

ホカロン「僕だって知らない！プンプン！」

あ～あ～、二人はとうとう、喧嘩して家に帰ってしまいました。ホカロンはまた、氷の長テーブルの広場から緑の大地へ駆け抜け、緑の小高い丘を駆け上り小さな木の小屋に着きました。ホカロンはそこでいすに座り、小屋の横にあるお茶畑の葉で作った紅茶を飲みながら

ホカロン「は～。さー今度は何して遊ぼうかなあ。あーそうだ、アイミン呼びに行こう。それ～！」

ホカロンはさっきの喧嘩を走りながら忘れてしまったのです。いえ、きっとどこかに置いてきたのでしょ。ホカロンはまた同じ道を走り抜け、マンモスにまた挨拶してアイミンの家の玄関に来ました。

ホカロン「あーそーぼー！　アーイーミン！」

アイミン「はーあーいー！　もお何よホカロンったら～」

アイミンがブツブツ言いながらドアを開けると、ホカロンがアイミンの手を握って走りだします。



二人はともだち？

ホカロン「僕の家裏庭にアスレチック作ったんだ。一緒に遊ぼう！」

アイミン「本当！ わ～い！」

2人は裏庭のアスレチックまで競争し、アイミンが少し早く到着。

アイミン「わ～. . .」

ホカロン「アイミン！ こうやって遊ぶんだよ！」

ホカロンは木に飛び乗って、ガシャガシャ揺らします。

アイミン「ちょっと待って、そんなに揺らすと危ないよ！」

どうやらアイミンは、『石橋を叩いて渡る』性格のようですね。

ホカロン「向こうまで競争だー！」

ホカロンはどんどん進んでいってしまいます。アイミンは木に捕まりゆっくりと気をつけながら

アイミン「まって～！ ホカロンずるい～！ おいてっちゃんかんだでねー！」

ホカロンはそんなことお構いなしにどんどん進んでいってしまいます。

ホカロン「やった～！ 1ば～ん！」

その少し後から、アイミンが弦を伝ってやって来ました。

ホカロン「僕の勝ちだね」

アイミン「違うよ！ ホカロンは言うこと聞かなかったから、ルール違反で負けー！」

ホカロン「負けじゃないもん！ 僕がかったんだもん！」

アイミン「私をおいてっちゃったんだから、ホカロンの負けです～！」

ホカロン「ぶ～、違うもん！ 僕の勝ちだもん」

ホカロンは思わずアイミンを突き飛ばしてしまいました。

アイミンはコテンとお尻をつき、

アイミン「痛い！ もお～、ホカロンなんて嫌い！」

アイミンはプンプン怒りながら帰っていってしまいました。ホカロンは少し涙を浮かべながらトボトボと小屋に帰り、さっき作った紅茶の残りをズズズ～と飲み干しました。木の丸いテーブルの横にある小さなベッドに横になり、ホカロンは考えます。

ホカロン「次は何してあそぼっかな～. . . そうだ！ アイミンを誘いに行こう！
ってね。

ホカロンはまた、アイミンの家に走っていきました。またマンモスの門番に挨拶をし、アイミンの家のドアをノックします。

ホカロン「トントントン あーそーぼー！ アーイーミーン！ あーそーぼー！」

ところが、返事がありません。

ホカロン「トントントン あ～そ～ぼ～！ ア～イ～ミ～ン！ あ～そ～ぼ～！」

二人はともだち？

ホカロンは何度も呼びますがアイミンは返事もしません。ホカロンはなんだかさみしくなってきました。また何度か呼びましたが、それでも誰も出てきません。ホカロンの目には、涙がたまってきました。その時です。横になって寝ていたマンモスが目を開け、その長い鼻でホカロンの小さな肩をトントンと叩きました。ホカロンはマンモスの方を見上げると、マンモスはその長い鼻で、動物園の方向を指差し、いえ、鼻差したのです。そう、アイミンは一度家に帰ってから、一人ではさみしいので動物園に遊びに行ったのでした。ホカロンの顔に笑みが戻りました。

ホカロン「ありがとう！」

ホカロンは涙をぬぐって走りだしました。

ホカロンがようやく動物園に着くと、アイミンは、象の背中に寝そべっていました。そこへホカロンが駆け寄っていきます。

アイミン「あ、ホカロン」

ホカロン「アーイーミン！」

ホカロンは、アイミンの乗っている象の足もとまで来ました。

ホカロン「はあ、ふう。 僕も乗せて〜！」

アイミン「いいよ。好きなのに乗りな。キリンもいるし、シマウマも早いよ」

ホカロン「僕も象に乗りたい」

アイミン「え？これは私の！」

ホカロン「象に乗りたいの！」

アイミン「象さんは私が最初に乗ったの！」

ホカロン「やだやだ僕が象さんに乗りたい〜」

ホカロンは地べたにねっ転がって手足をバタバタと動かし、だだをこねました。

アイミン「もお、しょうがないなあ。じゃあ私はキリンさんに乗るから、ホカロンは象に乗りたい」

ホカロン「本当！？ありがとー！」

そう言って象の背中に乗ると、

ホカロン「よーし、じゃああそこの丘の上まで競争だー！」

と、こんな具合です。もちろん、競争した後はまた喧嘩して、お互いにプンプンしながら帰っていききましたよ。そうしているうちに、だんだん日が落ちてきました。2人はベッドで横になりながら...

アイミン・ホカロン「明日は一緒に何して遊ぼうかなあ...」

喧嘩するほど仲がいい？

おしまい。

氷の国のアイミン 2人はともだち？

<http://p.booklog.jp/book/22599>

著者 : shimmei

絵 : mimi

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/shim-puboo/profile>

『氷の国のアイミン』ホームページ (PC)

http://space.geocities.jp/shimmei_office/im.html

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22599>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22599>